

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

忠

e-mail: shakaisushin@nifty.com

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポル 幡ヶ谷九〇四 電話 03) 33377-4649

FAX (03) 3299-5367

振替 〇〇一〇〇一九一五八四三二 労金 中央労金本店 No.1154163

購読料 月額 700円

6カ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言

独占資本の犯罪

原野人……2

すべての原発を止めさせよう

なぜ急ぐのか

滝野 忠……3

—リビア侵略の本質—

死の灰

ザ・エコノミスト……5

エネルギー多量依存からの脱却

橋爪 健郎……7

—福島第一原発事故と川内原発(鹿児島県)—

震える——春闘……

—集中回答の崩れ一層の個別化進む—

帯広闘争団 国労盛岡地本にお見舞い

国労帯広闘争団……10

生かされなかつた教訓

相沢 瑞男……11

—大地震 避難所、行政、障害者—

読者からのおたより……

14

旬刊 社会通信

NO. 1094

二〇一一年四月一五号

二〇一一年四月一五号発行
(毎月一日・一五日二回発行)

独占資本の犯罪

すべての原発を止めさせよ

事態はさらに深刻に

事態は改善されないどころか、ますます深刻になっている。東電は2号機について、燃料棒の被覆管は「損傷」したが、中の燃料が解ける「熔融」に至ってはいないなどとごまかそうとした。第三者の立場とはいえ推進側でやってきた原子力安全委員長も、さすがに腹を立ててこれを否定した。「2号機では計8時間から9時間、空だきになっている。我々は熔融が起ったとみている」と断言。「压力容器の底部から溶けた燃料が落ちる可能性も否定できない」とも。

燃料が解けるのは二千数百度。原子炉本体（压力容器）の融点は千数百度だから、底に穴があいたり、制御棒貫通孔の周辺が損傷して、いくらかの溶けた燃料が格納容器に落ちて、それがさらに格納容器を破損させたのかもしれない。

緊急炉心冷却系が機能しなかったために、1、2、3号機とも炉心が水中から露出していった。破損・熔融の進行を食い止めるために大量の海水を使用した。ふだんは真水（淡水）を、炉心冷却材として炉とタービンの間を循環して使っているので、若干の真水の補給水は常時必要だが、さほど大きな貯水はない。その貯水さえ地震と津波で消失していたかも知れない。

急を要する冷却に海水が必要になったのである。しかしこれはあくまでも緊急用であって、早急に真水を用意してそれに切り替える必要があった。高温塩水は腐食性が高いし、2、3ミリしかない燃料棒同士の隙間に塩がたまると、冷却も不能になる。

すでに1、3号機の炉本体や重要な配管等も破損しているらしく、炉内を冷却していたはずの高レベル汚染水は、タービン建屋ばかりか、地下トレンチなど放射線管理区域外にも大量に漏れ出し、海にも流出していると思われるうえに、一切の作業を極めて困難にしている。決死的な作業を強いられる労働者はすでに限界に達している。

放射能の大气放出を止めるには、早急に各炉の燃料の上部まで浸水させ、その水を別に準備した（はずの）ポンプと熱交換器で一〇〇度以下に冷却・循環させる状態を作らねばならない。しかし高レベル排水となって炉からどんどん漏れ出てしまうようでは、それもままならない。

少なくとも三年は水冷却が必要だ。崩壊熱が低下して空冷に移行できるのはそれからだ。それ以前にお棺のように閉じ込めようとすれば、それこそ危険だ。

プルトニウムが検出されるようになったのは、懸念を増す。どの炉心にも多少はウランから生まれたプルトニウムが混在するが、特に3号炉ではプルーサーマルによって初めから多量に炉心にある。これが水蒸気爆発等によって環境中に飛散することになれば悲惨だ。ストロンチウム⁹⁰は測定されているのか。

計画停電の虚構

これは国民に対する独占資本の巨大な犯罪だ。電力、電機、重機等の巨大な独占資

本は莫大な利潤のために、反対や懸念の声を無視して地震列島に原発を造り続けてきた。電力資本の利潤（事業報酬）は不変資本（機械、設備、核燃料等）の大きさに比例して得られるように、国家と電気事業法に保障されている。原発は単位発電量当たりの投資される不変資本が突出して大きい。日立、東芝、三菱等だけでなく、九電力資本も大きな利潤を得てきた。

すべての原発はすぐに止めなくてはならない。火力等の稼働率を上げれば、原発をすぐに全面停止できる。鉄鋼、石油精製、化学、パルプ等々は、大きな自家発電設備を持っている。これら企業は普段は安い大口電力を電力会社から買っているが、必要とあらばいつでも送電を止めることができる契約になっている。逆に電力会社が購入することもできる。「計画停電」には「原発は不可欠」と思わせる意図を感じる。

風力発電を本気で造らせねばならない。これは市町村や個人に本格的に造れといっても無理だ。送配電網を独占し技術も所有する電力会社につくらせる以外にない。原発に比べて安全性は言うに及ばず、工期はごく短く、建設費も維持費もはるかに安いうえに、雇用を増やす。音波の弊害は民家から一定の距離を置くだけでよい。洋上にも陸上にもいくらでもできる。デンマークでは風力が二〇%以上を占め、原発は皆無だ。ドイツもこれに学ぼうとしている。

反原発の運動を

ドイツでは日本の事故をみて連日二〇万を超える人々がデモに立ち上がった。メルケルは稼働延長を中止せざるを得なくなっている。問題は日本の労働者・市民だ。何千万円もの高酬を得る連合単産幹部に反原発や脱原発運動の指導を期待しても無理だ。自分たちの創意工夫で闘いを盛り上げるしかない。一人の自治体議員がいれば、意見書、決議、住民投票の条例制定等々、大きな闘いの中心になることができる。原発の重大事故は、全国・全市町村の労働者、農漁民、小経営者に子々孫々にわたって被害を及ぼす。

新社会党は『綱領』で「原子力発電を速やかになくすることもできます」として、『中期的な政策』では「原発の建設や輸出は中止し、老化度や危険度の大きいものから速やかに廃止します。『もんじゅ』やプルサーマルなどプルトニウム利用とその他の再処理事業など、核燃料サイクルは即時廃棄します」、廃炉や廃棄物については「自治体と住民と専門家による監視のもとで、発生者が責任を持って原発敷地内に管理保管するようにします」「風力…など更新性エネルギーの開発利用を促進します」と定めている。われわれはこの旗を高く掲げて、全ての原発を止める先頭に立とう。

（三月三〇日記 原野人）

なぜ急ぐのか

ーリビア侵略の本質ー

カダフィが「反乱軍」を追いつめはじめると、「リビアの人々をカダフィ大佐の攻撃から守る」（キヤメロン・英首相）、「われわれには時間が残されていない」（フアンロンパイ・EU議長）と、米・英・仏・伊、それにアラブのカタール、UAE（ア

ラブ首長国連邦) などからなる有志連合(多国籍軍) が①リビア上空の飛行禁止空域を設定、②カダファイ軍への空からの攻撃を開始、③反政府軍「国民評議会」への支援、④リビアへの侵略戦争を開始した。この戦争の目的はなにか。二つである。

米・英・仏・伊は一九三〇年代中東で石油が発見されてから、この地域の石油利権をめぐり抗争した。中東石油産出国を中心につくられたOPEC(石油産出国機構)は、欧米石油メジャーの独占支配体制を崩し、各国の国営石油会社の力が大きくなった。こんななか、各国は石油利権とその配分を求め、北アフリカ・中東諸国の独裁政権を支援し続けた。石油価格は上昇の一途、独裁政権はその利益をポケットいっぱいのためにこんだ。

アブラの大生産国なのにガソリンがない、値段が上がる、そしておきまりの政治腐敗と汚職の蔓延、二五歳までの若者が人口の五〇%を占めるこれらの国々で職がない、失業者は増え続ける。それら資本主義という制度的仕組みにもとづく矛盾が若者の民衆蜂起の状況をつくった。

民衆革命は米が中東支配の要としたエジプト・ムバラク政権を退陣に追い込むばかりか、アラビア海・紅海・ペルシヤ湾防衛を任務とし、イラク、アフガニスタン、場合によってはイランへの出撃基地があるバーレーンにもおよんだ。バーレーンは面積七百二十平方キロ、人口七十五万(三〇%以上は出稼ぎ労働者)の小さな国。アブラがバーレーン人を潤し、一人当たり国内総生産は二万六千ドルを超える。民衆革命はアラブの敵・イスラエルを包囲するかのときだ。もしカダファイが権力を再度にぎれば、カダファイはアラブの英雄になり、アラブ民族主義を揺り動かし、反イスラエル、イスラエルと同盟する欧米諸国・ロシアの脅威となる。したがって、カダファイをせん滅せねばならんということだ。

第二はリビアの石油利権の再配分だ。仏・伊・英は「リビア内戦をはやく納めないと、難民が押し寄せ宗教、民族、移民問題がさらに複雑になる」と戦争の目的を語る。これは正しくない。リビアは第二次世界大戦まで伊、そして英仏の植民地だった。大アラブ主義を実践し植民地のクビキを解き放ったのがカダファイだ。それはリビアの正式な国名「大リビア・アラブ社会主義人民ジャマヒリヤ国」に示される。「ジャマヒリア」とは「直接民主制国家」とのことだ。

石油利権をめぐる争いは中国などを中心とする新興国の経済成長で一国の存亡にかかわるまでもなった。それを示すのが、伊の二人の発言だ。

リビア侵略に先立って、伊外相は「わが国は新生リビアにも参加する。地域的に近いことで難民などの問題を抱えながら、利益は他の国のものとは考えられない」、また伊の極右政党幹部は「カダファイ政権が倒れば、われわれの石油やガスが取り上げられ、難民がもっと押し寄せてくる」と。二〇世紀の帝国主義者の発言が現代によりがえっている。英の場合、カダファイ寄りだった労働党政権に対し、「反カダファイ」を鮮明にすることで、石油利権にありつきたい。

「有志連合」は一枚岩じゃない。独は戦争に参加せず、米は「地上部隊は送らない」。リビア情勢は世界政治に大きな影響を与えること必至である。

死の灰

ときに自然災害が歴史を変えることがある。日本を襲った津波はその一つとなりうる。
(The Economist 2011年3月19日号 社説から)

津波

“Tsunami” が世界に通用する数少ない日本語の一つであるということ自体が、この国がいかに自然災害にさらされ続けてきたかを物語っている。しかし、日本の痛ましい歴史をさかのぼっても、今回の惨伏は言葉では言い尽くせない。マグニチュード9規模の地震（日本史上最大のものでありヒロシマに落とされた原爆三万発に相当する）の後には、いくつもの町を洗い流す波が襲った。沿岸の町々の状況が徐々に判明しているが、恐怖のスケールは増すばかりである。氷のように冷たい大波が破壊された町の残骸を内陸数マイルに及んで押し流し、高齢であったり素早く動けないために高台にすぐには這い上がれなかった人々の多くを死亡させた。五四二九人の犠牲者という公式発表は目を追って確実に塗り替えられていくだろう。人口の半数以上が溺死したか行方不明という町もある。

このような災害に直面しても、奥ゆかしい (decent) 人々はこの上ない受容力を發揮している。略奪は見られない。津波の難を逃れた人たちから不満の声はほとんど聞かない。東京では、確定申告期限に間に合わせるべく人々は忍耐強く列をつくっている。いたるところで混乱の中に少しでも秩序を作りだそうとする平静な決意がある。救援のためにボランティアが駆け付けている。一九九五年の神戸の震災ではおろした態であった自衛隊は、傷ついた地域に続々と派遣されている。危機勃発時に超低支持率であった菅首相は、どんなに偉丈夫な指導者にとっても難題そのものの打ち続く災難にもかかわらず、国内秩序を外観上は何とか保ち続けている。神戸の震災での政府的外れな対応は、日本の自分自身への信頼を大きく振り崩したものだだったが。

拡がる憂慮

災害直後の惨劇は日本のみに関わるものとなるが、長期的には世界中の人々に影響を及ぼす問題が出てくる。世界第三位の経済への衝撃を危惧して株式相場は落ち込んだ。日本銀行は巨額の流動性注入によって金融パニックを抑えるための会議を開いたようである。現段階での総被害額の見積もりは神戸の一〇〇〇億ドルを超える模様だが、豊かな国を破滅させるほどのものではない。電力供給の寸断は成長を損ない、そしてアジア諸国とのサプライチェーン（供給網）にすでに支障をきたしている。しかし、インフラストラクチャーへの新たな支出が地震による成長のマイナス要因をいくらか帳消しにするだろう。

しかしこのような見込みも、原発危機が悪化すると劇的に変わってくるだろう。すでに本誌が報じたように、福島第一原発の過熱した核燃料棒にヘリコプターから大量の水が浴びせかけられている。何度も爆発が起こり、火災と放射能漏れは日本の当局

が発表するより大きいようである。日本の原子力産業の長い歴史は隠蔽と無能力に覆われており、(個々の労働者の英雄主義はあつても) 原発の運営主体である東京電力の危機への対処は過去の行状そのものである。

この原発事故がたとえ迅速に制御下に置かれたとしても、そして放射能漏れが広範囲の健康被害を引き起こさずに済んだとしても、この事故は日本内外の原子力産業に大きな影響を及ぼすだろう。ドイツはすでに原発の操業期間延長という政治的に微妙な決定に関して保留すると発表した。米国はためらいながらも新規原子炉の建設に踏み出していたが、これも後退するようだ。新たな憂慮によるコストの増大が最大の理由である。

原子力のジレンマ

中国は野心的な原発立地計画の一時中止を発表した。しかし、現在二七基の原子炉が建設途上であり、他の国々の数の倍以上である。現在世界で建設中のほぼ半分を中国が占め、これに加えて五〇基以上が計画されている。長期的にこのような計画を抑制することはまずありえないだろう。人民の意志というより、なにがなんでも遂行するということである。中国は膨大なエネルギーを渴望している。ゆえに出来る限り多くの供給源からそれを満たそうとしている。原発の増強はもとより、さらなる風力、天然ガス、そして石炭ガス発電の増強が行われようとしている。

これは原子力の大きなジレンマである。原子力の安全を最大限追求するには最善のプランと優れた技術だけでは不十分である。説明責任と透明性を生み出す社会が必要なのである。信頼されかつその信頼に値する制度をつくることのできる社会である。どの国もこれをうまく成し遂げてはいない。そして日本の失敗はますます明らかになる。しかし同時に、それとは裏腹に、民主主義は強固で妥協しない少数派が事態の進展を阻止するのにたいへん好都合な制度でもある。そしてこれは今後の原発立地計画にとつてはなおさら言えることである。ゆえに原子力は、その立地にあたって必須の、安全性を保持するための揺るぎない文化がある国ではなく、それに欠ける国々にますます広がろうとしているのである。新規立地競争において中国に最も迫っているのはロシアである。

しかしそれでもなお民主主義国が原子力に背を向けてしまうのは誤りであろう。原子力は信頼できるエネルギー源であり、相対的に安全なエネルギーであり、二酸化炭素を排出しないという利点をもつ。原子力発電設備を建設し燃料を補給することによって抱え込む危険性を補って余りある。今日時点で犠牲者という観点からみても、優位性がある。チェルノブイリ事故による死者数は未だ不明なところがあるが、せいぜい数千人といったところであろう。それに対して、中国の炭鉱では毎年二〇〇〇人から三〇〇〇人が確実に事故死している。そして煤煙に汚染された大気は炭鉱とその周辺でそれ以上の犠牲者を出している。ゆえに豊かな国々が原子力を電力供給の手段として維持することはいまなお理にかなったことなのである。とりわけ、核への経済的・技術的関与を維持することにより、世界に適用される安全性と核不拡散の高い基

準を主張する資格を強化することができるからである。しかし、パニックと不気味に立ち上る煙、目に見えない静めることのできない脅威に直面しては、理性的な道をたどることは容易ではない。

日本政治の今後

原子力エネルギーによって傷いたばかりか自国内に代替エネルギー資源のない日本は痛ましいばかりの選択を迫られる。原子力放棄は天然ガスとおそらくは石炭の輸入につながる。原子力を維持しようとするると国民的トラウマに突きあたりこれを克服するとともに、小さくとも次の災害の現実的危険を受け入れねばならない。

日本でしばしば起こる大災害は、その後大きな変革を引き起こしてきた。一九二三年の大震災は、軍国主義につながった。第二次世界大戦の敗北と原爆投下は、平和的成長の道を選択させた。神戸の震災は、内向き志向をさらに強めた。

同様に、今回の破滅的大災害は国民心理に巨大な衝撃を与えたようである。それは日本の人々の災害への印象的な対応に現れているだろう。いまこの国がぜひとも必要としている冷静さ (sticism) と自信の保持を眼にして、世界中がこれに畏敬の念を抱いている。見かけ倒しの原発管理によって例証された統治の秘密主義の失敗は、さらなる政治改革要求につながっていくだろう。菅氏が放射能に関する政府情報は信頼のおけるものであると民衆に確信させることができるかぎり、そして津波を生き延びた人々の寒さと飢えを和らげることができるかぎり、彼の手腕は日本のさらなる自由化に向けて強化されていくことだろう。そうでなければ事態は暗転していくであろう。賭け率は高い。だが、日本は（政治システムが機能していない落魄した国として）ぜひひでも変化を必要としている。遠く安全な場所に身を置いて眺めると、これは可能に見える。日本の人々はこのおぞましいときを死と悲嘆、哀悼にのみ費やすことなく、再生のときとしても奮闘していくであろう。

エネルギー―多量依存からの脱却

―福島第一原発事故と川内原発（鹿児島県）―

三月一八日現在、福島第一原発事故は報道されているだけでも現地周辺だけでなく次第に深刻さが明らかにあります。報道では最悪の事態でどういうことがありうるのか一切ふれられていませんが、それが何時なのか分らないにせよ今後東日本全体が大変危険な状況で安心できる状況ではありません。地震はいつ、どこで、どれくらいの規模が起こるか現在の人間の知識では予想できないことを最後の教訓として確認すべきです。福島原発の事態がいつでも川内原発で起こる可能性は現実問題として考えるべきだと思います。

今まで多重の安全対策設備で安全が確保されているから心配ないと言われてきました。しかしそれら全てを無効にする地震によって、そうした安全設備にもかかわらず、基本機能である「止める・冷やす、閉じ込める」の安全三原則が機能できなくなるこ

とが明らかになりました。最悪の事態に対処するとされた緊急炉心冷却システムも働

かず、原子炉の燃料棒は露出し、現在でも部分的に生じている可能性もあるかもしれない炉心溶融という最悪の事態も現実的可能性となりました。炉内の圧力上昇破壊を止めるため、放射能ガスが大気中へ放出されています。

今回の事故は地震とそれによる津波で所内電力システムなどが破損し冷却機能が喪失したのが共通の原因でした。川内原発の周辺地層ではこのような津波は生じる可能性がない、だから川内原発では心配しなくて良いと言う宣伝が今後予想されます。今までのメディアに登場する学者たちは仮に今回の事故が一段落したら「これだけの自然災害にも対応できる」という論理で3号機推進を進めることは間違いありません。

川内原発もそうですが、今まで原発事故の避難範囲は一〇キロ以内とされ、行政もそういう想定で原発建設を認可してきました。しかし現実の避難勧告は最初は三キロ、そして一〇キロ、二〇キロ、三〇キロ次第に拡大しています。アメリカやフランス大使館では八〇km範囲内の自国民を避難させました。

川内原発も1・2号機建設に地元住民が反対していた最大の根拠が地震による災害でした。一九六〇年代、原発は地元住民にとって「希望」であった時代、九電は川内は地盤が悪いので原発は適さないと言う理由で玄海に決定しました。その後、国策としての原発推進が進むと川内にも建設が進められ地盤調査が始まりました。ところがボーリング調査するとやはりポロポロの地層が多く、現地作業に参加した推進を望む地元住民は、このままではやはり地盤の問題で設置できなくなるかもしれないと思い、ポロポロ地層のボーリングコアを別の所のしっかりとしたコアと入れ替えるというゴマカシを行ったのです。

その後一九七〇年代初め、私たちも含めて原発の危険性を地元住民に伝え、原発とはどんなものか認識した住民の反対運動が始まりました。かつて推進のためごまかした行為が反対のための最大の根拠となったのです。国会でも問題にされましたが、九電はそのようなことがあったのは事実かも知れないが、それはほんの一部に過ぎないとして無視し、川内市も県も国も行政もそれ以上問題にしませんでした。ゴマカシが仮に一部としても、それは例えば銀行で一人の行員がお金をごまかしても、一行員がただけで銀行としては信用は無くならない、と言っているのと同じだと思います。あつてはならないことがあつたにもかかわらず、それほど問題は無いとされ建設が強行されました。

今回の福島原発事故は予測できなかった自然災害が、いつどこでどんな規模で生じるか人間には予測できないということが再度明らかになったことです。川内原発周辺では問題になるような規模の地震は無いとして3号機増設が進められようとしています。しかし鹿児島県北西部地震で発生した断層が存在していたなど、どの研究者も予想していませんでした。現在も断層に沿った川内川で地震が発生しています。さらに鹿児島県は多くの活火山に囲まれており、過去多くの火砕流でなめ尽くされています。

地震などの自然現象の予測が十分信頼できないのであれば、人の能力を超えた災害

をもたらず原発を止め、そのためには従来のエネルギー多量依存による「快適生活」の変革を願うはずです。今私たちの生きている最大の意義はそうした新しい社会をめざすことだと私は思います。

(反原発・かごしまネット 橋爪 健郎)

震 え る 一 一 春 闘

―集中回答の崩れ一層の個別化進む―

三月一日に発生した東北地方太平洋沖地震は、一一春闘をも揺るがした。自動車や電機など、主要産業の組合の春闘回答日である三月一六日には、金属労協（ＪＣ）で五九組合中、回答が示されたのが三三組合に止まるなど、従来の集中回答が崩れ、一層の個別化が進む結果となった。今後の日本経済の動向犯見通しが立たない中では、来期以降の春闘にも影響を与える懸念がある。

連合は、震災直後の三月一四日に「東北地方太平洋沖地震による災害と対応に対する会長声明」を発表、政府による地震発生直後の対応を評価するとともに、対極的な観点から、政府・与野党の協力のもと、心配される原発対策と情報開示の徹底、関東エリアでの電力供給不足に対して、生活の混乱・不安解消のためのライフライン確保などを求めた。そして、「国難」ともいえる事態に対して労働運動の社会的使命、連帯の精神で、一致結束して被災者救援と復旧に組織の全力をあげて取り組むとともに、行動を呼びかけた。一方で、一一春闘については、恒例であった主要産別の回答日の記者会見を取り止め、コメント発表はしていない（一八日現在）。

そして、主要産別の回答日である一六日には、連合加盟の産別の内、自動車総連が「震災の影響などにより、回答引き出しが困難な場合は、早期解決を図ることを前提に日程の再配置を行うことも可」とした見解を出したものの、一時金に焦点を当てた要求に対して回答が示された組合もあった。

トヨタでは要求通りの一時金五・〇カ月分十七万円、富士重工業では昨年実績を〇・四カ月上回る五・〇カ月、マツダでは四・五カ月などの回答が示された。しかし一方では、日産やホンダなどでは、回答が延期された。

また、電機連合は一四日に「現在までの交渉状況を踏まえ、延期や中断により組織的な混乱を招くよりも、交渉を継続することを確認して回答日に臨んだ。その結果、定期昇給を含む賃金体系維持を確認したとともに、一時金では日立で五・三カ月、三菱電機では五・七四カ月の回答が示されるなど満額ではないものの、前年実績を上回る回答が示された。ただし、富士重工業や三菱電機では、経営側から組合側に「震災の被害によっては、再協議する場合がある」と申し入れがあった。

震災による被害規模の把握や復興への道筋などの予測が立たない中、日本経済の動向も不明なままだ。日経平均株価は、一五日には約八六〇〇円まで暴落し、過去三番目の下落率を記録した。翌日以降は日本銀行の市場への資金供給や、主要七カ国（Ｇ七）の円売り介入などにより九〇〇〇円台まで戻したものの、今後の動きは不透明なままだ。

震災地にあるトヨタや日産などの自動車関係や、東芝、NEC、ソニーといった電機関係などの製造業の工場は未だ復旧、再開の目途は立たず、被災を免れても部品の調達や輸送が滞り、生産に影響を与えている。

また、二〇日には牛乳やホウレンソウから、甲状腺がんの原因になることがあると言われる放射線ヨウ素が規制値を越える値で検出され、農作物への影響も始めている。さらに直接的な被害がなかった首都圏でも、燃料不足などの影響で商品輸送が滞った関係で、品薄や買いだめが起きている。

放射能漏れ拡大への不安や、震災による国民生活への直接・間接的な影響、来春闘への課題など、今後も予断を許さない。〔京和〕二〇一一年三月二四日号〕

帯広闘争団 国労盛岡地本にお見舞い

国労盛岡地本委員長 齋藤 庄司 殿

今回の地震災害に遭われた盛岡地本組合員・家族の皆さんに心からお見舞い申し上げます。

思いおこせば一九九〇年五月一〇日〜六月五日まで第一次の盛岡物販オルグに帯広闘争団の上谷賢二、馬淵茂の二名で岩手県を回らせていただきました。

岩手県労センター帯広闘争団受け入れ集会で 関 正昭（県労センター議長）は、「首を切られた痛みは首を切られた者にしかわからない、しかし、首を切られた痛みは意識として分かるはずだ。岩手県労センターは帯広闘争団を支援し続ける。」と挨拶されました。

盛岡市内の各単産、花巻、北上、水沢、久慈、田老、宮古、大槌、釜石、盛、大船渡、陸前高田、気仙沼、本吉、一関、久慈から気仙まで三陸海岸までの海岸線は素晴らしい風景が延々と続く所でした。

田老町では、チリ津波の最高到達点の標がありました、チリ地震の経験を生かされた防波堤が築かれていました。国労盛岡支部の組合員は内陸側の本線からはずされ、海岸線の駅や保守作業に従事させられておりました。

気仙沼地区協 委員長 熊谷 晴伍 書記長 高橋 亮一

気仙沼駅連合

委員長 高橋 亮一 副委員長 後藤 真敏 書記長 熊谷 秀三（当時、南気仙沼駅勤務。）

私は今回の地震と津波による被害の状況（安否確認）が、まったくわからない中、国労東日本大地震災害対策本部ニュース三月二三日 第一三号によれば、熊谷秀三さん（五五歳）が三月二〇日に死亡が確認。

帯広闘争団は、この報を受けて、心よりお悔やみ申し上げます。当時、はじめて、気仙沼でお会いして帯広闘争団に勇氣と激励を頂いたことは、決して忘れません。

今回の津波で被災されました家族の気持ちを思うと言葉もできません。深い悲しみとともに誠に残念であります。 合掌

（追伸）今、現地が混乱していると思われませんが、わたしたちが出来ることが有りましたら申し出下さい。 〔二〇一一年三月二四日、帯広闘争団 馬淵 茂〕

生かされなかった教訓

—大地震 避難所、行政、障害者—

三月一日（金）に東北・関東を大地震が襲った。（マスコミでは、NHKが東北関東大地震、民放が東日本大地震と言っているのので、ここでは大地震と書く。）私は、仙台の山手の学校に勤務していて地震被害にあった。それほど被害は、学校も自宅もなかったので不幸中の幸いではあったが、この報告は、地震被害の状況を経験し聞いた（伝聞ではなく、実際に経験した人から聞いたもの）ことを率直に伝えたいと思う。阪神淡路大災害などの教訓があったにもかかわらず、全く備えていなかった自分自身の反省でもある。

それは突然に 三月一日その日、児童の下校は二時三〇分であった。月に一度の学区巡視で、児童の安全下校の状況を見回りする日であった。同僚から「巡視に行きますか。」と促されて、駐車場にむかってまさに車に乗り込もうとしたその瞬間に大地震が襲ってきた。立っていられず、二人で駐車場にしゃがみ込み、揺れが収まるのを待った。いままで経験した地震以上に長く感じられた。（後に、揺れは約三分との報道があった。）揺れが収まり、同僚が「これが言われていた宮城県沖地震ですかね。」と言ったが、その時の私の感想は三〇年ほど前に経験した宮城県沖地震より、揺れは「穏やかだったと感じた。（後の報道では、三〇年前の地震は縦揺れが強かったが、今回は横揺れが強かった。ようである。）それで、「そうかな、三〇年前のほうが強かったよ。」と答え、見回りに行こうとした時、校舎内から委員会活動で残っていた児童が避難のために出てきた。それで、ことの重大さを感じ児童が避難してきたほうに向かった。

多くの児童の顔が真っ青で、泣き出している子もいた。校庭の真ん中で児童を落ち着かせていたら、別のほうから放課後児童クラブ（学校では「のびっ子クラブ」と呼んでいる。）の児童達が避難してきた。総勢六〇名ぐらいの児童と職員、のびっ子クラブのスタッフが児童の安全を守った。その時は、まだ下校途中の児童の安否は、頭から離れていて、目の前の児童のことだけを考えていた。そうしているうちに、下校していた児童が学校に戻ってきて、そうだった、まだ家に着いていない児童がいるんだと思いだした。

のちに児童から聞いた話では、外に出てきた地域の方々に避難誘導されたり、通りがかりの青年にしゃがみ込むように促されたりといろいろな方に児童は助けられていた。

そして、雪が降り出してきた。避難してきた児童の多くは、ジャンパーなどを着ていなくて「さむい、さむい」の連発と泣いている子が多くいた。それでも、元気な児童が「地割れだ。」と叫んだので見てみると、規模は小さいが、確かに校庭が長く地割れをしていた。そうこうしているうちに、被災した地域の住民も指定避難所になっている、学校に避難してきた。

避難所の生活へ 余震が何回かあったが、揺れも収まり、雪も強くなってきたので、体育館で保護者の迎えを待つことにした。体育館を開けたところ、天井の建築資材（砂状のもの）が床に広がり避難できる状況ではなかったので、急いで掃除をして体育用

マットを出して、座れるようにつくった。ステージには、天井据え付けの照明器具が落ちて散乱していた。職員が職員室に集められ、校長から「この状況から、学校を避難所にする。区役所からの指示があるまで、責任を持たなければならぬ。」との話で、避難所運営がはじまった。それが、午後三時三〇分ぐらいだったと思う。（後に校舎内を点検していたら、落ちて壊れた時計は二時四九分を指していた。）

保護者が児童を迎えに来出したのと並行して、地域の人々が体育館に集まってきた。来た方々には、とりあえず一人一本の備蓄してあった水（五〇〇c）を渡した。そして、夕方にはこれも備蓄してあったアルファーム（適量の水を加えると二時間半、お湯で二〇分）による炊き出しをすることを決めた。暗くなり、寒くなってきた体育館に、学校中の対流式ストーブ六個を運び入れて、学校の灯油を使用して暖をとろうとした。しかし、広い体育館に六個のストーブでは周りが少し暖かくなるだけであった。それなら、地域に住む工事業を営むYさんがガソリン発電機を持ってきてくれて「これで、体育館を明るくして、ファンヒーターを使って。」と言ってくれた。この申し出は、本当にありがたかった。

事実、暗かった体育館に明かりが灯ると、不安にかられていた避難してきた人々の表情に明るさが戻った。また、学校の大型ジェットヒーター二台が使えるようになり、暖かさも倍増した。避難してきた子どもたちも輪になって持ち込んだゲーム機で遊びだして、避難所全体に明るさ出てきた。それは、この学区がそれほどの被害を受けなかったことにもよる。そのころは、沿岸部で起きていた津波による大災害は全く知らなかった。それどころか、今日は停電だが明日には回復すると樂觀視していた。また、水道は止まっていたのだが、学校は給水塔が屋上にあるので、それが出ているので、止まったとは分からなかった。それから、数日間の避難所運営が始まった。

行政の無策 こうして、家族の安否と自宅の被害状況もわからず、避難所支援で体育館に泊まり込むことになった。その後、時間をみて、つながりにくい携帯電話を駆使してやっと家族の無事を確認した時はほっとした。

明かりがつき、大型ストーブが稼働しても広い体育館はなかなか暖まらない。また、避難所を開設しても区役所からは、なんの連絡、情報もない。そんな中で、学校のラジカセを持ってきて、乾電池でつけたラジオからは信じられない状況が伝えられてきた。また、同僚が持っていた携帯テレビでは、沿岸部の津波被害の様子を伝えていた。そこでやっと、今回の地震は大変な災害をもたらしたことを認識した。深夜の体育館の中で、避難者の支援をしながら、これからどうなるんだろうという漠然とした不安にかられた。

そんな時、深夜一二時を過ぎて、やっと区役所から市の職員がやってきた。でも、来たときの雰囲気は災害を受けた方が避難所に避難してきたという感じだった。それで、区役所から支援に来たと聞いた時には、正直びっくりした。もっとびっくりしたのは、その人は、何らかの仕事や指示をするでもなく、ただストーブの前に座って暖を取っているだけだった。なんのための区役所からの派遣なのかと憤りをおぼえた。行政は、「三〇年内に九〇%の確率で宮城県沖地震がおきる。住民は万全な備えを」

と常々言ってきたのに、行政の方が無策であったことが、明らかにになった。それは、この避難所だけの話だけではなくて、他の避難所、他の市町村も同様であった。しかも、派遣されてきた人間は、なんの働きもせず次の日には、引き上げられた。

避難所は、地域の町内会の運営とされ、町内会の役員が先頭に立って運営することになった。しかし、多くの人々それも不特定多数の人々をまとめて指揮した経験がない方々には、大変なようであった。また、災害備蓄品（アルファ米・水・クッキーなど）が各学校（避難所指定）に備えられていたが、地域の市民センターにも備蓄してあった。この備蓄品が、災害の時にどのような使われ方をするのか明確にはなっていないのである。私の学校では、暖かいご飯を三食提供することができたが、別のところでは、冷たいご飯（アルファ米は水で二時間半、お湯で二〇分で食べられるようになる。）だけのところもあったようだ。また、一日に一食だけのところもあったようだ。このように、災害時の避難所運営、避難民対応のマニュアルが全くないことが露呈した。まさに怒りを感じる。それでも、私がいたところは、被害が少なかったから良かったものの、津波で流された地域の状況は全くの無策と言っていると思う。

障害者は 避難所に避難してきた方の中で、少なからず障害を持った方がいた。寝たきりの方、車いすの方、発達障害を持った方などさまざまな方がいた。一人ひとりの障害状況を把握しての対応はできなかったもので、わからなかったが、雪が降ってきて、たぶん深夜は零下の気温の中では、大変な避難所生活だったと思う。身体障害の方々は、常々はベッド生活だと思いが、体育館の床では、生活しにくい。それで、体育館の山台（ひな壇）を工夫してベッドのように作ったり、学校の和室から畳を持ち出して、和室風に作ったりとこのような対応も必要と感じた。

その中でも大変だったのは、トイレの問題である。障害者が使用できるトイレは体育館にはなかった。トイレの時は、寒い中、いったん外に出て、校舎のトイレを使うという状況だった。夜の使用は本当につらかったと思う。もちろん、トイレには暖房はなかった。また、体育館で簡易トイレを使用している方々がいたが、匂いをとでも気にしていた。大勢の人が避難するところの施設改善を全くしていなかった。法令で避難所指定が決まっているので、単に指定しただけで、その施設の使い勝手がどうなのかという点には、目を向けていなかった。また、発達障害を持っている方にとって、避難所生活は大変なのだろうと感じた。いつもと違う状況に対応できなく、パニックを起こししやすい発達障害を持つ方にとって、全く知らない人の中の生活は困難の一言だと思う。実際、避難所に避難してきたが、奇声を発しながら体育館の中をうろろろして、全く落ち着かないようだった。夜になっても続いていたため、家族が耐えられなくなり、一家で出て行ってきり戻ってはこなかった。その時は、避難所をどう運営するかで、頭がいっぱいで障害者の困難さまで、考えが及ばなかったし、出ていく方を止める策もなかった。

本当に、災害は弱者を直撃するということが身をもって体験できた。この点は、行政に強く要求していかなければならないと感じた。

（宮城 相沢 瑞男）

◇ 読者からのおたより ◇

予言 原野人が言っておられたように、原発の安全性は崩れました。統一地方選の勝利へ頑張ります。少額ですが残金はカンパです。 (岐阜・K)

編集部より 外国の友人からのたよりは原発問題ばかり。

現実には私たちが国労は反原発をスローガンで闘ってきた。現実の問題になってしまった事故。一基六千億円、何をものがたるか。 (埼玉・H)

編集部より 前号(二〇九三号)、今号の一〇九四号の原さんの稿、小気味よい。

相次ぐ労働相談 震災にもなつて被災地ばかりか全国で仕事を失う深刻な状態が労働者を苦しめています。宮城では①会社から休んでくれと言われたが、給料はどうなる、②施設長から「ガソリンを入れて訪問介護を続行しろ」と命じられた。「とても給油できない」と答えたら大声で怒鳴られた、③店舗が休業することになったが、会社から「休業」ではなく「休職」扱いにするといわれた。違いがあるのか、④「県内での事業活動を縮小するので三日後に東京に転勤しろ」といわれたが、親の介護で転勤できない。 (全労協ファックス情報、三月二八日)

編集部より こんな情報、商業紙でも多く取り上げるようになりました。

残金カンパ 二〇二二年一月分まで、残りはカンパです。

(栃木・I)

編集部より 過日、電話ありがとうございました。お心使いありがとうございます。

車検七百台突破 深川闘争団が「JR採用差別事件」の勝利をめざして進めている生活者労働者協同組合の車検事業は、平成五年創業時より継続し、この三月一四日旭川闘争団・大場正次の日産エクスプレイン受注により七百台となり、公園管理業務と合わせて、事業体の柱である車検の一千台大台目標へと「JR雇用」を引き出し、高齢などで戻れない解雇者の職場確保のためにも、しっかりとした闘争の勝利と闘争団の結束を再確認した。 (深川闘争団)

支援を 地震発生当日は東京や千葉など震源地を遠く離れた都会の被害が報道されましたが、一夜明けて次々とテレビに映し出される東北地方・太平洋側沿岸の惨状は想像を絶するもの。かつてこれほどの光景を見たことがあったでしょうか。地震が発生して早一週間近くになるうとしていますが、いまだ孤立し救助を待っている人たちがいること、水・食料などの救援物資が大きく不足していること、行方不明者が一万人を超え、街や集落そのものが壊滅状態にあるため被害状況の実態さえつかみ得ない状況にあること、福島原発の爆発による放射能漏れが発生し、被爆の恐怖の中にあることなど、これまで経験したことのない事態が起こりつつあります。私たちとして、何ができるのか、何をしなければならぬのか。被災地メーデーから東北沖地震に対する支援活動が求められています。ともに行動を始めようではありませんか。(被災地メーデー) ニュース 三月二三日)

編集部より 神戸大震災から十六年。こんな巨大地震が東北、東関東に襲来しようとは。さらに原発事故。「新しい時代」づくりが求められているようです。

スーパーで働く私 あの時間私は自宅に。即テレビをつけ、余震に脅えながら、貴重品を詰め、単一電池を買いにスーパーへ。深夜二時頃迄テレビを見続けました。スーパーで働く私ですが、週明けの十四日から、客が殺到！買い占めに走る。ドラッグストア、百元均一ショップ等の店も品薄でガラ空きの棚、棚。放射線の問題、『千葉・Y』さん、原野人さんに共感です。 (東京・K)

放射性ヨウ素131 私は「放射性ヨウ素131」と聞きたびおびえてしまう。二〇数年前のことだが、放射性ヨウ素131の内部照射を、六年間に三回受けたからだ。鉛でできていて隔離病棟に入院し、フランスからの輸入薬、放射性ヨウ素131(7mm×2mmほどの小さな錠剤)を、防護服を着用した医師が、鉛のブレイと越しにピンセットで、私の口の中に入れる。私の胸の腫瘍(甲状腺癌)に取り込んで叩きつぶすというもの。「統計上は十五年間は白血病にならない確率」と説明された。最近私は投与量が気になり、インターネットで調べたところ、「今各地で空気や飲料水一リットルから一時間に検出されている量と比べて桁違いに高い(二〇〇〇億〜一〇兆程度)量」と。退院時には身体と持ち物の放射線の量が測定され許可される。治療を受けた六ヶ月ほどは、体がだるく食欲なく便秘吐き気皮膚の乾燥、鬱状態、自分が自分でないみたいだ。白血球の激減で風邪を引いたら死ぬかもと脅かされたり、原因不明の胸水にも悩まされたり、また天候などちよつとした変化にも影響され動けなくなったり。今は比較的安定しているが定期検診や検査では恐怖する。私の場合には鉛の病室での入院生活は三週間余だった。四年前に退出基準ができ、今ではほとんど約一週間か二週間とか。大丈夫なのだろうか。福島原発問題と重ねあわせ勉強してみたい。(東京・T)